



「巨人の星」と
「竜馬がゆく」



masahiko mita

昭和42年、ぼくは小学四年生だった。

当時、マンガ雑誌が出始め、野球少年だったぼくは、少年マガジンに連載されていた「巨人の星」に夢中になっていた。毎週新しい号が出ると、学校帰りに書店に立ち寄り、「少年マガジン」を買うと急いで帰宅し、真っ先に「巨人の星」を読んだ。

そのなかで、主人公「星飛雄馬」のスパルタ親父、一徹父ちゃんが飛雄馬に向かって諭した言葉が妙に印象に残った。

挫けそうになっていた息子に投げかけた言葉。

「飛雄馬、死ぬ時は坂本竜馬のように、前のめりになって死ね」という名文句だ。

「敗れると分かっているけど、常に前向きに立ち向かえ」という意味で教えたのだと記憶している。

誰だろう、坂本竜馬って？

社会の教科書にも出てこない「坂本竜馬」をぼくはまだ知らなかった。

ぼくの故郷仙台は「初売り」が名物の街だ。年初めの一月三日に、繁華街のほとんどの店が、豪華な景品をくれたり、抽選などを行う。

書店も例外ではなかった。特等が「豪華本棚」だったり、千円以上買うとブックカバーをくれたりという楽しみがあった。

確か翌年の「初売り」で書店に出かけた時だったと思う。

「竜馬がゆく」という本が、ふと目に留まった。

「うん？」

手にとって見ると、それは「坂本竜馬」の生涯を書いた小説だった。

ぼくは隣にいた父に訊いた。

「これ、買ってもいい？」

「それは大人の本だぞ。それに全部で五巻もあるぞ。読めるのか？」

父は訝しげに答えた。

とにかく坂本竜馬に興味を持っていたぼくは、それが読みたいくて仕方がなかった。

「読めるよ！！」

「難しい漢字ばかりだぞ」

「大丈夫だよ。辞書引けばいいから」

「じゃあ、買ってもいいぞ。そのかわり最後までちゃんと読むんだ」

父は半信半疑だったに違いない。

今でも、書棚にあるその本は、とても小学四年生が読めるようなものではない。大人向けのハードカバー。文字も小さく、本当に難しい漢字ばかりだ。

それから数日後、読めるどころか、辞書を引いても意味さえ分からない漢字ばかりだったにもかかわらず、勘と推測で読み終えた。

面白かったのだ、坂本竜馬という人間が。

第一巻の「立志篇」を読んだぼくは、「読んだよ、続きも買っていいよね？」と父に尋ねた。

父は驚いた顔をした。まさか小学四年のぼくが分厚いその本を読みきるとは思っていなかったの

だろう。

「本当に全部読んだのか？」

「うん」

「じゃあ、続編を買ってもいいぞ」

うれしくなったぼくは、すぐに本屋に行き、第二巻の「風雲篇」を買った。

こうしてぼくは、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」全五巻を読みきった。

読み終えた後「大きくなったら竜馬のようになって、日本を変えてやる」と、熱く竜馬の魅力を語るわが子を見て、両親はぼくの将来に過剰な期待を抱いたかもしれない。

あれから四十年以上経つ。

結局、竜馬のようにはなれなかったし、日本を変えることもできなかった。

さすがに今では年老いた両親も、過剰な期待をぼくに持つのはやめたようだ。

それでも、あの本を読んで、常に前向きに生きていこうという気持ちを持ったのは確かだ。

そういう意味では、間違いなく「竜馬がゆく」は「私に影響を与えた1冊」なのだ。

「巨人の星」と「竜馬がゆく」

<http://p.booklog.jp/book/48679>

著者 : makopapa77

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/makopapa77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48679>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48679>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.